HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	町衆と文芸 : 近世初期における堂上と地下との関係をめぐって［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	工藤, 隆彰
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12955号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70208
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Takaaki_Kudo_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　工　藤　隆　彰

審査委員　主査　教　授　冨　田　康　之
　　副査　准教授　野　本　東　生
　　副査　准教授　鈴　木　幸　人

学位論文題名
町衆と文芸
―近世初期における堂上と地下との関係をめぐって―

・当該研究領域における本論文の研究成果

近世初期の和歌史・歌壇史において「堂上と地下」との交流関係を明らかにすることは極めて重要な課題である。本論文は中世後期に台頭した富裕な商工業者である、所謂町衆の活動を通してこの課題に取り組んだものである。特にこれまで近世和歌史において顧みられることのなかった灰屋紹益等を取り上げ、和歌や古典をめぐる堂上と地下との関係を、古今伝授に関わる事柄までをも含めて具体的に示すことに成功した。このような人々の活動を丁寧に確認していくことが、近世初期の和歌史の実態を解明する有効な方法であり、そのような例を明瞭に示したことは高く評価できる。

本論文の具体的成果として、第一章においては肖柏の弟子で古今伝授を受けたとされる堺の町人伊予屋宗珀を取り上げ、これまで同一人物とも見なされてきた茶人の天王寺屋宗伯とは別人であることを明らかにした。また、三条西実隆との交流を『実隆公記』や『高野参詣日記』等の諸資料から具体的に明らかにし、高野詣が実隆と宗珀の交流の端緒であったことを指摘した。更に近世初期における宗珀の堺の文壇での位置付けを確認した。

第二章では、茶の湯の大成者に位置づけられる千利休に関して、従来の研究では里村紹巴・日野輝資がそれぞれ利休の連歌・和歌の師とされてきたが、連歌の師とされた紹巴と利休との関係を明らかにするため紹巴の参加した膨大な張行に参加する連衆を確認し、その結果両者の師弟関係は想定しがたいものであることを指摘した。また、日野輝資は『南方録』の記事により和歌の師とされているが、利休との私的な交流を示す資料がないこと、および利休の書状に見える詠作の殆どが狂歌であり、正風体の和歌が多くない点等を指摘し、『南方録』の記事の曖昧な点を示した上で二人の師弟関係の記事は誇張に過ぎないものであることを明らかにした。また、後代の茶人達や先行研究が利休と和歌・連歌の関係を積極的に認めようとして来た傾向とその原因について指摘した。

続く第三章では灰屋紹由・紹益父子を取り上げた。紹由については、連歌作者として里村家の連歌師及び堂上の人々との交流を具体的に指摘し、八条宮智仁親王とは両吟百韻を行うまでの強い関係を築いていたことを明らかにした。また、歌人である紹益についても父に劣らず堂上の人々との深い交流関係があったことを見出した。その背景には、紹由の連歌によって築いた人脈の一部を引き継いでいた点、また紹益自身も蹴鞠・茶の湯を介して堂上の人々と交流を持っていたことを指摘した。

第四章では、第三章に引き続き灰屋紹益についての考察を進めた。紹益は井原西鶴著『好色一代男』の一典拠にもされた当代切っての遊女である吉野太夫を妻としたが、その折の逸話に紹益を勘当する父と一門が、養父である紹由及びその一門と従来考えられてきた。その

見解に対し、父とは実父である本阿弥光益であり、一門とは本阿弥一族を指すものであることを指摘した。更に、紹益が紹由の養子となった後も光益及び本阿弥一族との実質的な関係を持ち続けていたことも明らかにした。またその上で、光益の茶人としての活動や、徳川義直をはじめとする尾張藩の人々との具体的な交流関係までをも明らかにした。

第五章では、灰屋紹益の古今伝授に関する活動の資料として『にぎはひ草』を中心に取り上げ、紹益から光友への伝授の経緯や、飛鳥井雅章の指導の下で紹益が光悦書写の古今伝授の箱を拝見するまでの経緯を明らかにした。

第六章では、本阿弥光悦とその一族が居住したことのある洛北の鷹峯が、本阿弥一族の法華信仰に基づく宗教的な理想郷、あるいは光悦周辺による芸術の場として認識されたりしてきたが、同じく同地の野間玄琢・三竹父子の活動をも含めて再考証した結果、京都所司代板倉家の「文化人サロン」を形成していた人々による文芸活動の一拠点として鷹峯の新たな文化史的位置付けを行った。

・学位授与に関する委員会の所見

本審査委員会において、本論文を構成する各章のいずれもが非常に高い水準で成果を挙げているものと判断した。しかしながら各論を合わせた全体的な統一性について見ると、十分に緊密であるとまでは言えず、近世初期の堂上と地下との関係について本論文の成果が果たしてその全体像に迫り得たかについては、やや不十分ではないかとの意見があった。しかし、このような問題点は申請者も十分に自覚しており、更に他の町衆の事例も継続して研究を進める計画を立てている。よっていずれ解消されるべき質のものであり、上述の研究成果をいささかも損なうものではない。

本審査委員会は、以上のような審査結果により、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると結論した。